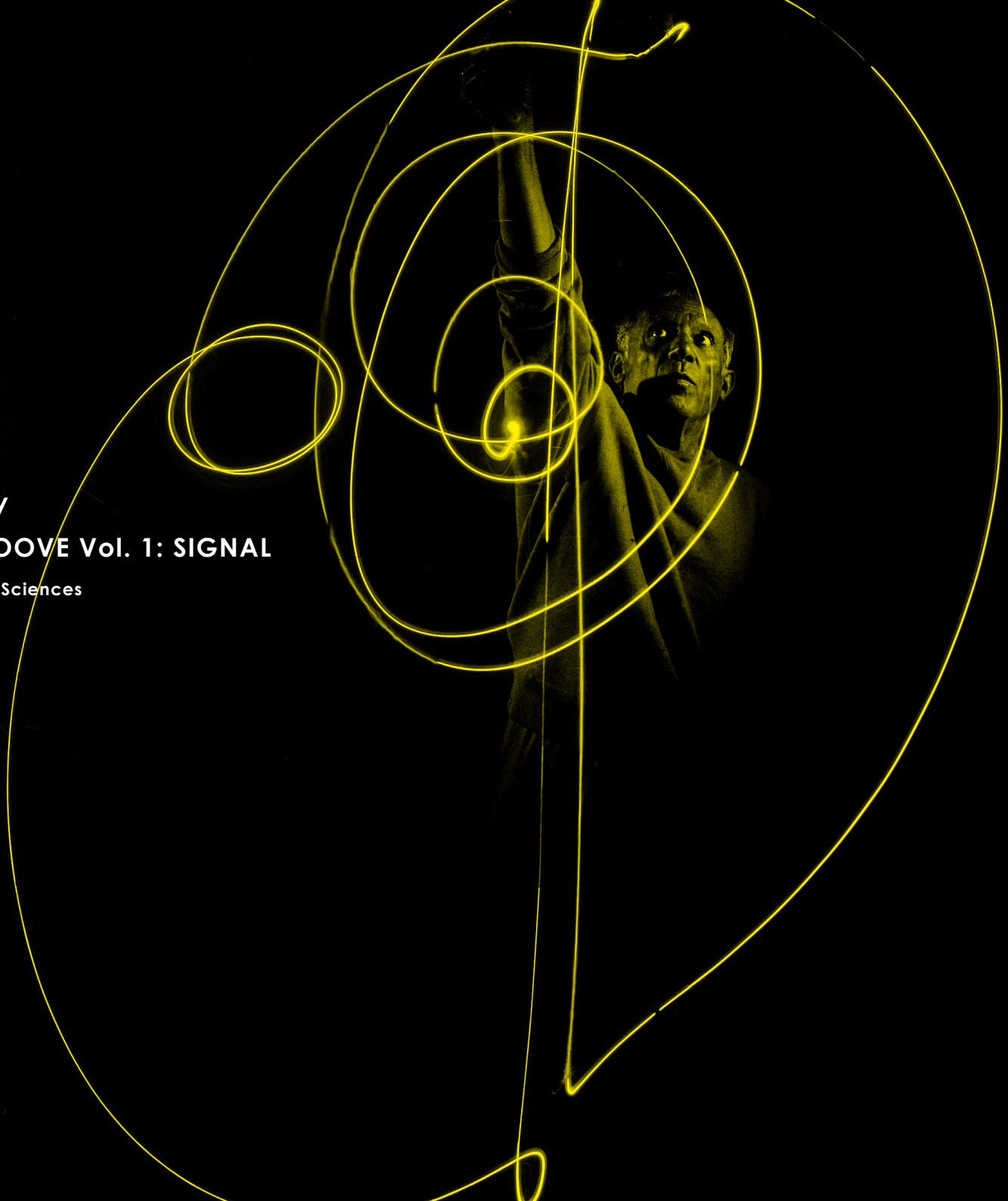

Kyoto University

ACADEMIC GROOVE Vol. 1: SIGNAL

Humanities and Social Sciences

KURA

SIGNAL

SIGNAL

—— 信号。兆し。警告。予感。直感。そして、叫び。

この世のあらゆるものはSIGNALを発している。人はそのSIGNALを感じ、受け止め、驚き、考え、やがて動き出す。
そして、知らぬ間に自らがSIGNALを発していたことを知る。この世界はあらゆるSIGNALに対する反応の集積なのだ。
だからこそ今、SIGNALを感じ取れ。動き出すためのきっかけはそこにある。

[表紙写真] ピカソのライトドローイング(Drawing with Light)

暗闇の中、画家のパブロ・ピカソがペンライトを使って空中に絵を描く。
それをカメラのシャッターを全開にして撮る。
そのようにして「Drawing with Light」という写真作品は撮影されました(1949年制作)。
光の軌跡をフィルムに定着させたものなので、描いているピカソも、カメラマンのジョン・ミリも、撮影の場に立ち会った人々も、
撮影中に絵を見ることはできません。しかし、出来上がった写真に表れていた光の軌跡は紛れもなくピカソの絵でした。
暗闇の中で発信されたSIGNALは印画紙の上にはっきりと刻まれていたのです。
(Photo by Gjon Mili, The LIFE Picture Collection,1949)

Cover photo: ©Getty Images

Kyoto University
ACADEMIC GROOVE Vol. 1: SIGNAL
Humanities and Social Sciences

Editors: 稲石奈津子、天野絵里子、Aron WITTFELD、神谷俊郎、小泉都、佐々木結、鈴木環(以上、KURA)
Senior editor: 清水修(ACADEMIC GROOVE MOVEMENT)
Art Director, Designer: 古田雅美(opportune design inc.)
Illustrator: 逆柱いみり

提携:京都大学人社未来形発信ユニット

編集・発行:京都大学学術研究支援室(KURA)
〒606-8501 京都市左京区吉田本町 学術研究支援棟/Tel. 075-753-5161/e-mail. jinsha@kura.kyoto-u.ac.jp

発行日:2019年11月1日

©Kyoto University Research Administration Office(KURA)

KURA

京都大学 ACADEMIC GROOVE Vol.1
『SIGNAL』の感想をお寄せください

ACADEMIC GROOVEとは、学問の現場に漂う「わくわく感」やノリ、すなわちグルーヴのこと。『SIGNAL』はこのACADEMIC GROOVEを社会に伝えるために制作されました。上のQRコードから入れるSIGNAL感想フォームにて、ぜひ、読後のご感想をお寄せください。今後のACADEMIC GROOVE制作に活用させていただきます。

あなたにとって、学術的発見のSIGNALとは？

研究者が何かに気づく瞬間、発見をする瞬間、成果を生み出す瞬間、必ずきっかけとなるSIGNALが存在する。日々蓄積され続ける巨大な学術体系はすべてSIGNALを源としているのだ。

史料や遺跡に、虚心に向き合ってふと感じる「違和感」、それに対して沸き上がる「クダラナイ思いつき」、そのうちのひとつかふたつが、いろいろな事象と結びつき始めて「仮説」へと昇華する、ふわっとした手応え。 馬場基（歴史学／日本古代史，木簡学）

人の間、種の間、細胞の間など色んな次元で伝達されるシグナルを、好奇心のアンテナで感じるフィールドワーク。

古澤拓郎（地域研究／人類生態史，東南アジア・オセアニア）

一見バラバラな現象の背後に、共通の何かが見えてきたとき

太郎丸博（社会学／社会階層論）

予感⇒直感⇒確信

熊谷誠慈（仏教学／チベット，ブータン）

フィールドでみつけた小さなひらめき。それを新しい言葉にする。そしてフィールドで何回も確かめてみる。そこから世界を説明することが始まります。 石川登（人類学／東南アジア地域研究）

「誰も意識していなかった問題を思いついたとき」がお答えです。無論それに至る過程ではレビュー、資料、統計データ、方法を求めて気の遠くなるほど地味な作業の試行錯誤を繰り広げますし、肝心の問題の答えが導き出せないこともありますが。

溝端佐登史（比較経済学／ロシア・東欧）

未知の和音の発見

齋藤嘉臣（国際政治学／外交史）

わかった（気がする）！ それを人にもわかるかたちにする。フィールドと研究室と家を行き来しながらそれを繰り返す。 高田明（人類学／アフリカ地域研究）

史料の山を読み解きながら、ずっと前から抱えたまま忘れそうだった疑問をふと明瞭に思い出すこと。

高谷知佳（法学／前近代法制史）

古典文学を読んでいて感じる違和感。それは作品を読み誤っているか、古人の心を理解していないということ。 金光桂子（日本文学／中古・中世の物語，和歌）

常識的な見解、あるいは教科書的な説明を述べた後で、「何か違うな」と感じる居心地の悪さ。ゼミの質疑応答やメディアの取材など、会話中に感じることが多い。そのため、対談やインタビューにはどんなテーマでも原則的に応じている。 佐藤卓己（メディア文化学）

悪魔は細部に巣くう

山内裕（組織論／サービス）

身体全体が興奮するテーマとの出会い、それは運命。出会いを信じてただ歩もう。道はおのずと拓かれる。

明和政子（比較認知発達科学／ヒトの心の創発と発達）

経験からくる直感。あるいは、社会現象に対する得も言われぬ違和感

柴田悠（社会学／幸福，社会保障）

史料分析の辛さから逃げるように小説を読んでいると、ある言葉が、落雷のように史料の価値を伝えることがある。

藤原辰史（歴史学／食と農の思想）

同じことを違う仕方で考えるということ、これに尽きます。思想系の研究は、結局同じ一つの問いを深め続ける作業ですが、それだけでは煮詰まってしまいます。あえて別の場所から、別の言葉遣いで、場合によっては別の言語で、同じ問題を語り直してみること。同じ問いを交差点とする何本もの道を放射状に通していくこと。それを重ねるうちに、同じ問いが新しくなっていきます。 杉村靖彦（宗教哲学／フランス，京都学派）

一枚の写真 ── ビジュアルが発するSIGNAL

何かをさりげなく訴えかけてくる写真。私たちの視覚は時として予期せぬSIGNALを感知する。
それを受け取るか受け取らないか。すべては自己にかかっているのだ。

出口康夫（分析アジア哲学）

若林靖永（マーケティング）

河野泰之（東南アジア研究）

出口 ▶ この写真には二つのことを感じました。まずテーマとしては「コミュニケーション、特に情報化されたコミュニケーションの誕生」です。人の声帯から出た音声が、糸の振動と、それが耳元に伝わった際の身体の震えという別のメディアに転換される。「音声がメディアを跨ぐことで情報化される」ということ。それからもう一つは写真の持っている「政治性」です。写真は単なる世界の風景の断片ではなく、その背後に、写真には写っていない撮影者が隠れていて、撮影者と被写体の間には、いつも一定の関係、場合によっては政治的な関係が結ばれているということです。特に、この写真の場合、被写体は、アジア（東南アジア?）の子供ですが、撮っているのは、子供でなく、アジア（東南アジア）の人でもないような気がします。

河野 ▶ これ、ゴム園ですね。どこの国だろう。この子たちの顔立ちからしてベトナムかカンボジアではないかと思います。私は「平和になって良かったなあ」と感じました。出口さんのおっしゃる政治性の思うつぼですね。

若林 ▶ 写真をみて最初に感じることは「撮影者の作為の強さ」です。どんな写真にも撮影者の意図と意図せざるものが写っているという両面があるわけですが。それにしても糸電話で外でおしゃべりを子供がするというのが日常だとは思えません。これは撮影者、あるいはそれを見てもらうオーディエンスにとって「見て欲しい、見たいファンタジー」のようです。そして、道具を使ったコミュニケーションというメッセージが何を意味するのか? 携帯電話でも販売普及するつもりなのでしょうか? などという意地悪な印象がまず浮かびますね。

出口 ▶ 意図としては、あと批評性ということも考えられますね。現代の情報化社会、スマホやSNS漬けの生活に対する批評。

若林 ▶ 批評、つまり否定ではなく、肯定ではないでしょうか?

出口 ▶ 両義的な面も感じます。

若林 ▶ 批評、つまり否定なら、携帯をオフにして過ごさないと。二人が手を握らないと。

出口 ▶ 面と向かって話せばいいのに、わざわざ情報化している。

若林 ▶ です。

出口 ▶ まあ、そういうことですね。

若林 ▶「道具を肯定している」ということだと思います。

出口 ▶ これは「顔を合わせず、このようにスカイプのチャットで議論をしている私達」に対する両義的な批評なのかもしれません。

若林 ▶ でも人は繋がれるということでないでしょうか。

出口 ▶ 繋がることで、距離を生み出す。

若林 ▶ つまりスマホでの会話やメールもこの絵のように繋がっているというメッセージを読み取りました。

出口 ▶ 糸電話の糸の長さがそれを象徴している。でも、この子たちの笑顔はいいですね。これは演技ではないような……。もしかして、初めて糸電話なるものに触れたのかもしれません。

若林 ▶ これをボーイミーツガールだとすると、もちろん糸電話の糸の長さが、もどかしい二人の間の距離なんでしょう。男の子の勇気がもう少し……。

出口 ▶ 僕は姉弟だと読みました。まずはお姉さんがやってみせて、次に弟君が、それをまねてやった瞬間を切り取ったものなので、男の子の「どこかおどおどした調子」が出ているような。

若林 ▶ 男の子は何をしゃべっているのかな? 女の子はニコニコ聞いています。「あのー、ぼくー、えーと……」みたいな。

出口 ▶ そうですね。「本日は晴天なり」なんて決まり文句はないでしょうから。

若林 ▶ はい、はっきりと言語化するというのはない文化だとすると「今日の月は綺麗かな?」とか（笑）。

出口 ▶ ああ、それはいい口説き文句ですね（笑）。

若林 ▶ 褒めていただき恐縮です。

出口 ▶ いずれにせよ、彼らの自然さの背後にも、それを演出している撮影者の「細心の意図」があり……。

若林 ▶ はい、コミュニケーションの原始性、本質を問いかけているようです。

出口 ▶ それがまた河野さんが指摘されたように「戦乱がおさまり平和が戻った東南アジアのゴム園を舞台として、その原始性が可視化されている」といったところでしょうか。

若林 ▶ じゃあ後は河野さんに「解説」してもらいましょう!

河野 ▶ えー、お二人とも少し知性に毒されてるのでは?（笑） この子たち、確かにお姉さんと弟かもしれません。お姉さんが、たまたま糸電話の材料を見つけて、作ってみたのかな。これ、缶のように見えるけど、糸電話は缶でできましたっけ。糸はこの長さしか見つけられなかったのでしょう。弟は糸電話するのが初めてなのではなかろうか。口の当て方が変だもの。東南アジアの子供たち、こうやってありあわせのもので何か作って、よく遊んでいるから。そういう知恵って大切なんだけど、徐々に失われていっているなぁ。

出口 ▶ お、そろそろ時間ですか? 結構、楽しかったです。ありがとうございました。

若林 ▶ 頭と心の体操、あるいはレスリングですね。ありがとうございました。

河野 ▶ なぜか、最後の解説をさせていただき光栄です。ありがとうございました。

補足説明

● ゴムノキは20世紀初頭に南米から導入された東南アジアを代表する商品作物です。タイヤ用の天然ゴムに対する需要の拡大を反映してゴム園は近年も拡大し、森林減少の要因とされています。（河野）

● 東南アジアでは、第2次世界大戦後もベトナム戦争やカンボジア内戦等が続きました。1980年代後半、「インドシナを戦場から市場へ」というスローガンが掲げられたころから、政策や社会の動向が経済発展重視へと大きく転換しました。（河野）

● 「写真」と「情報」は現代哲学の重要なトピックです。哲学的な写真論の古典としては、ヴァルター・ベンヤミン『写真小史』、スーザン・ソンタグ『写真論』などがあります。また最近の情報の哲学としてはイタリア人哲学者ルチアーノ・フロリディが展開している「<情報圏>の哲学」が知られています（『第四の革命—情報圏が現実をつくりかえる』）。（出口）

現在の京都タワー（撮影:kinoko）

京都をめぐる追憶のSIGNAL

歴史は私たちに様々な気づきを与えてくれる。過去から現在へ、マクロな視点で物事を眺める時、ひとつのSIGNALが立ち現れる。ここでは、風景史、文化史、経済史、それぞれの側面から、「京都」が発してきたSIGNALを露わにしていこう。

鬩ぎあう眼差しの欲望

中嶋節子（都市史・建築史）

新幹線に乗って京都駅に近づくと、窓越しに京都タワーが目に入ってくる。何故か京都に帰ってきたとほっとする。1964年の建設時には、古都の風景を破壊するものとして、指弾の的となった京都タワーも、今ではすっかり京都の風景に馴染んだようだ。

風景が発見されたのは近代とされる。もちろん風景は以前からそこにあったが、それを風景として捉える眼差しの登場は、わが国においては明治期である。近代化・産業化に伴う風景の変容、ロマン主義的また自然主義的な風景受容の台頭、近代科学による風景の理解、郷土や故郷への帰属意識の拠り所としての風景への関心の高まりが、それまで風景として意識されなかった眺めを風景として見出す契機となった。そして風景の発見は、風景を保存するとともに、享受することを欲する、＜眼差しの欲望＞を生み出した。

今なお解消されない風景をめぐる保存VS開発の構図は、真逆の意見の対立に見えて、＜眼差しの欲望＞を同根とする。そう考えるとき、問題解決の難しさが了解されよう。そして、風景の内に＜眼差しの欲望＞を見出すとき、風景がいかに重層的な意味を孕むかに気付かされる。

高所からまちを眺める装置として建てられた京都タワーは、同時に、まちから眺めるランドマークともなった。眼差しが交差する京都タワーは、それゆえに京都の風景として受け入れられたといってよい。京都タワーは、古都京都への＜眼差しの欲望＞を可視化する。

明治期の広告が示す、京都産業界の国際化

IVINGS, Steven Edward（経済史）

幕末の一時期、京都は政治の中心地となった。しかし、政治的対立に起因した大火と戦闘、皇室の東京への移転により、明治初期には人口が減少し、経済が悪化する。それでも京都は、昔ながらの産業を近代化し、1871年から定期的に京都で開催された博覧会を通じて国内外に向け「京都ブランド」を育て復興した。物理的なインフラへの大きな投資も著しい効果を上げ、たとえば、1876年に開通した国際貿易港神戸への鉄道は輸出を促進し、1890年に完成した琵琶湖疏水は住民に生活用水と産業に安定した水力を供給し、日本初の市街路面電車は市内交通を改善した。さらに、明治期に京都で創立された多くの高等教育機関は優秀な人材を多数輩出した。

図は、1903年に外国人旅行者向けのハンドブックに掲載された錦光山の陶芸の広告である。この頃までに、京都のいくつかの会社は神戸への鉄道を経由して製品を輸出するようになり、国際博覧会でブランド化を図っていた。この広告も「金賞 パリ1900」や「グランプリ ハノイ1902」と謳っている。海外の観光客に製造工程を視察するように勧めることで、製品を売ろうとしていたことにも注目してほしい。これは、京都ではすでに海外からの観光客がめずらしくなく、同社が意識的に国際的な評判を醸成しようとしていたということだ。

京都に暮らす外国人の私にとって、京都の社会や経済の歴史の一端を知ることは、町により親しみを抱かせてくれる。

錦光山陶芸の広告（1903年）
"Internet Archive"
https://archive.org/details/handbookfortravejohn/page/60
より掲載

岩倉具視と伝統文化の創造

高木博志（日本近代史）

明治維新期には、廃仏毀釈に象徴されるように伝統文化は否定され、欧米に美術品が流出した。しかし1880年代になり立憲制をめざす段階になると、一転して、伝統文化は、「一等国」になるために不可欠とされた。なぜならイギリス・オーストリア・ロシアなどの19世紀の列強は、軍隊・憲法・教育などの普遍的な文明の制度とともに、それぞれ固有の伝統文化を国民国家の紐帯として創造していたからである。

1883年1月に岩倉具視は、京都御所保存を核とする伝統文化復興の意見書を提出した。1869年の東京遷都後に衰微した京都御所で天皇の即位・大嘗祭を執行し、御苑内にのちの平安神宮や洋風迎賓館や宮内省支庁を設置し、賀茂祭などの朝儀を復興しようとする構想である。しかしこの「伝統文化」は日本古来のものとはいえない。京都御所における即位・大嘗祭の施行はロシアの二都制の影響である。ロシア皇帝は西欧に開かれた首都ペテルブルクではなく、古都モスクワに移動し戴冠式を行っており、そのことが首都東京と古都京都の関係に置き換えられた。さらに日清戦争後には宇治平等院鳳凰堂に代表される貴族文化や国風文化が、大正期の帝国の時代には豪奢な障壁画や南蛮美術を特色とする安土桃山文化が京都の伝統文化として顕彰された。明治以来、伝統文化がナショナリズム発揚とともに、上からの官製の顕彰になりがちであった歴史を考えると、今日、伝統文化は市民のものであるとの、とらえ返しが必要であろう。

写真：整備された今日の京都御苑（建礼門前大通り）（写真提供：一般財団法人国民公園協会 京都御苑）

理系研究者・選 ［貴方にSIGNALを与える起爆書ガイド］

人生を変えた一冊の本。
よくある話だが、本には人の生き方を変えてしまうほどのSIGNALがある。
ここでは、理系の研究者が本質を感じ取った「人生を変える一冊」、いわば起爆書を紹介しよう。

最後のストライク
―― 津田恒美と生きた2年3カ月

津田晃代 著／幻冬舎 刊

昭和61年10月12日、カープが勝てば優勝が決まる一戦、私は神宮球場にいた。カープリードで迎えた九回裏、「ピッチャー津田」のアナウンスに、どよめきとともに津田コールが沸き上がった。津田の躍動感あふれる投球で、最後の打者のバットが空を切った瞬間、スタンドは歓喜の渦に包まれた。翌日も球場に行った私は津田を見つけ、友人とネット越しに「津田！ 津田！」と声を限りに叫び続けた。私達に気づいた津田は、目の前まで来て立ち止まり、「シーッ」と指を口にあて、ニコッと笑った。津田投手はその後、悪性の脳腫瘍を患った。本書は夫人の手で書かれた闘病記である。津田が弱気になりそうな心を奮い立たせて懸命に生きたことがわかる。ど真ん中の直球で勝負する姿は今でも私の脳裏に焼き付いていて、ブータンなどのフィールドで勇気を与えてくれる。（坂本龍太・フィールド医学）

「ファウンデーション（銀河帝国興亡史）」シリーズ

アイザック・アシモフ 著／岡部宏之 訳／早川書房 刊

アイザック・アシモフ著の「ファウンデーション（銀河帝国興亡史）」シリーズは、銀河帝国崩壊後3万年続くと予想された人類の暗黒時代を1000年に縮めるために、天才数学者ハリ・セルダンが開拓した「心理歴史学」を駆使して未来を予測し、さまざまな困難を克服していく物語である。銀河百科事典には心理歴史学は難解な統計科学である、と記載されており、中学1年であったわたしはこの「統計科学」という用語にすっかり魅了されてしまった。高校数学ではおざなりな統計の授業しかなく、大学教養でも統計学は退屈であったが、専門に進み医療統計学に出会って、医療の問題を解決するために統計学が活き活きと用いられていることを知り、医療統計学こそ医療における心理歴史学であると確信（いや勘違いか）し今に至っている。（佐藤俊哉・医療統計学）

ローマ人の物語

塩野七生 著／新潮社 刊

全15巻からなる歴史小説。ローマ建国からその滅亡までを述べた大河ドラマとして強い感銘を受けた。ハンニバルとの戦いから、賢帝マルクス・アウレリウスの「終わりの始まり」以降まで、わくわくが詰まっている。中でも、作者の念が込められた第4巻と第5巻『ユリウス・カエサル―ルビコン以前』『―ルビコン以後』を読んで、カエサルへの尊敬や愛情を抱かない読者はいないのではなかろうか。数多くの名言も散りばめられているが、特に『ガリア戦記』からと紹介される「多くの人は、見たいと欲する現実しか見ていない」は、さすがカエサルそしてさすが塩野七生である。この言葉は、研究論文がとんでもない誤解をされるのは無理のないことなのだ、自分たちの意図を決して誤解できないように提示せよという今の学生指導、そして自らの戒めへとつながっている。（長田哲也・宇宙物理学）

「ゲド戦記」シリーズ

アーシュラ・K. ル＝グウィン 著／清水真砂子 訳
岩波書店 刊

田舎の少年が偉大な魔法使いになる成長過程を描く。魔法使いは世界の創造主たちが作った「真の名前」を操ることで、世界を滅ぼしうる超常的力を発揮する。そして少年は魔法使いの学校で、偉大な魔法使いたちが「真の名前」を探し出すために人生を賭けてきたことを教わるのである。わたしはこの魔法使いに科学者を重ね合わせる。科学は天才たちの発見してきた真理の積み重ねを力の源泉とする。その世界をも滅ぼしうる強大な力に謙虚な恐れを抱きながらも、さらなる真理を積み重ねていくことが科学者の使命、という作者のメッセージを感じる。（松田道行・細胞生物学、実験病理学）

作者の意図だけでは掴みきれない「芸術が発するSIGNAL」

言うまでもなく芸術には作者の強い意図がある。しかし、その強いSIGNALの隙間には期せずして作者の意図しなかったSIGNALが存在している。芸術作品に感動を覚える時、私たちは作者の意図とともに望外の「何か」を感じ取っているのだ。

芸術が発する時代のシグナル Japan Against Racism!

ミツヨ・ワダ・マルシアーノ（映画・メディア学研究）

ドキュメンタリー映画『Counters』（2018年、Lee Ilha監督）は、日本におけるヘイト・スピーチの権化とも言える「在日特権を許さない市民の会（在特会、桜井誠創立）」が繰り広げる人種差別の言動と、彼らのデモに立ち向かう集団「カウンターズ」の行動を追う。カメラは「カウンターズ」の一員、元ヤクザを自称する高橋直輝に密着する。しかし、沖縄米軍基地移転反対運動に参加していた高橋が、公務執行妨害罪と傷害罪で逮捕され、2018年に沖縄地方裁判所より懲役1年6ヶ月、執行猶予5年の有罪判決を下された。これが契機となりこの映画の日本での配給は断念され、日本における上映が封じられた。不幸は続く。同年4月、高橋は病気療養中享年45歳で亡くなった。

「あの人たちどっちもどっちだから、僕たち関係ないです、どうでもいい」、コム・デ・ギャルソンのT-シャツを着て路上を歩く大学生が呟く。ごく普通の若者の見覚えのある反応。1960年代末の学生運動の惨敗以後、日本では政治的であることが「ダサイ」「古い」「要領悪い」と否定されてきた。しかし、この映画は、日本が変わりつつある、その胎動を感じさせる。Politics from below（下からの政治）、informal life politics（貧しい人々の政治とされる、公的ではないが人々が生きる為に編み出した政治）といった新たな形の政治思想を持ち、それを行動に移すことの必要性を『Counters』は観客に知らしめる。

このドキュメンタリーは、「カウンターズ」というアクティビスト集団を描いているが、同時に彼らが実のところ一つのまとまりのあるグループではなく、プレカリアス（不安定）な要素を複雑に抱えた人々の集合体であること、また、そういったグループのアセンブリ（集まり）の力、そこから派生する時代のエネルギーを明示している。在日三世の左翼派女性が、この作品の中で言う。「以前、左翼派は常に清く、正しく、美しく、良い人じゃなければいけなかったの、でもそうじゃないヤクザで右翼の高橋くんみたいなやつが、われわれに賛同し一緒に行動するのって素敵だと思いませんか？」この作品は、決して高橋直輝を理想化したり英雄視したりはしない。しかし、彼を通して、日本が人種差別に立ち向かう必要性を声高に語りかけている。「Japan Against Racism!」

映画『Counters』（2018年、Lee Ilha監督）
左・右上：映画『Counters』から／右下：上映用ポスター
（ともに監督Lee Ilha氏より借用）

芸術は告発する

岡田温司（芸術史）

芸術を、世事のしがらみから切り離された別世界の何ものとか、単に目を楽しませるだけのものとかと思っているあなた、それはちょっと違います。たとえば、ナチスによるスペインの都市への無差別爆撃を告発した、名高いピカソの《ゲルニカ》にも明らかなように、芸術はいつの時代も、直接的にせよ間接的にせよ、社会や現実の状況と密接に結びついてきました。フランス革命の激動期において、ジャック=ルイ・ダヴィッドは《マラーの死》で革命指導者の暗殺を世に知らしめ、テオドール・ジェリコーは現実に起きた難破事故に取材した《メデューズ号の筏》で、王政復古下の政府のスキャンダラスな対応を暗示的に描きこんでいます。環境破壊や気候変動がこれほどかまびすしく叫ばれるようになるよりも前、1960年代の「ランド・アート（アースワーク）」は、自然のかけがえのなさに私たちの注意を促しました。ことほど然り、アートは告発するのです。アートには本来、優れて批判的なポテンシャルがある、このことを、わたしたちは今いちど肝に銘じておくべきでしょう。

作品の中に示される予感

岡田暁生（近代西洋音楽史）

芸術の歴史について考えるたび不思議に思うことがある。現実世界で何か「とんでもないこと」が起きるより前に、すでにそれが芸術の中で予感されているのである。野田秀樹と鎌田浩毅の対談集『劇空間を生きる』（ミネルヴァ書房）には、「未来を予見するのは科学ではなく芸術だ」という副題がつけられているが、現実に起きたことを芸術が後追いするのではなく、むしろ逆なのだ。第一次大戦前夜、芸術の世界では伝統的な枠組みを粉々にする潮流が生じていた。ピカソの『アヴィニヨンの娘たち』は、ニュートン力学的な均質の空間を奇怪に歪めてみせた。シェーンベルクの無調は、ドミソという重力を音楽から排除する試みだった。奇しくもこれらの作品が生まれたのは、アインシュタインが特殊相対性理論を発表したのとほぼ同時期である。これから世界で一体何が起きようとしているのか——それを知りたければ、今作られているアートの中にその予感を探すのが一番いい。

二十歳の原点

高野悦子 著／新潮社 刊

大学生だったころ、どの友達の部屋に行ってもこの本があった。学園紛争の嵐が吹く中で、「独りで生きている未熟な存在」と自覚し、悩み苦しんで自ら命を絶った一人の大学生の日記が、当時のすべての若者の共感を呼んだ。わたしは、森見登美彦さんの本の登場人物のようなだらけた生活をしていたが、やはり何のために生きるのかを真剣に考えた。結論は出ないながら、研究することが自分の存在意義になるような気がして、この世界に入り、それ以上考えることを先送りにして生きてきた。著者が亡くなり、わたしが生きているのは、ただの偶然かもしれない。研究生活が終わりに近づき、自分は何のために生きているのかを改めて考えてみたい。（沼田英治・動物生理学、動物行動学）

医学生

南木佳士 著／文藝春秋 刊

生体材料学という学問分野の出発点は科学的好奇心ではなく、「病める人の痛み」である。大切なことは、医療現場の声に対して真摯に、そして謙虚に耳を傾け、患者が抱く不自由を緩和することに持てる力のすべてを結集させることである。その訴えに対する応えの一つを「材料」という形で結晶化させて、患者まで届けることで完結される。本書は、南木佳士が実際に医学生だったころをモチーフにして書かれている。工学部出身の筆者がまだ研究の初歩も分からなかった時分、医師でなくても病める人の力になれる職業があることを知った。過酷な医療現場で人の命をあずかる仕事に就くことの大変さが、瑞々しく、そしてときには泥臭く、リアルな筆致で描かれている本書は、筆者が医療現場のお手伝いをする生体材料学を志すためのシグナルであったように思う。（薮塚武史・生体材料学）

アフリカの日々

アイザック・ディネーセン 著／横山貞子 訳
晶文社 刊

カレン・ブリクセンの自伝的小説（アイザック・ディネーセンはペンネーム）。時は第一次世界大戦。デンマーク生まれのカレンは、男爵という理由だけでスウェーデン人の妻となり、植民地支配が進んでいたアフリカのケニアに移って農場経営を始める。結婚生活はあっという間に破綻したが、一方で「自由なハンター」として生きるデニスと出会い、二人は心から愛し合う。

国家

プラトン 著／藤沢令夫 訳／岩波書店 刊

本書で展開される議論には、現代の倫理観からみて受け入れ難い部分も多い。プラトンの時代に何故このような倫理観が受け入れられたのか、どのような歴史を経て人類は現代のような倫理観に達したのか。この本を読んだ当時、研究者を目指す学生だった私は考えさせられた。しかし、正義に関する議論の姿勢は、研究者として自分の行為の価値基準をどこに置くか、どのように行動していくことが正義となるのかを考える指針となった。本書はその後の哲学に多大な影響を与えたとされる。科学の評価の仕方も時代を経て変化するが、持続的に人々にいいsignalを与える成果を得るためにどうすればよいか、今でも常に考えている。（湊丈俊・表面界面科学）

大博物学時代——進化と超進化の夢

荒俣宏 著／工作舎 刊

本書は18世紀から20世紀までの博物学の発展史を俯瞰したもので、当時の博物学者達の事細かなエピソードが詰め込まれている。個々のエピソードは有機的につながり、当時の博物学者たちの思想や世界観を明快に描き出している。ビュフォン、キュヴィエ、ヘッケルらの緻密で美しい生物図版もこの本の魅力を引き立たせている。地球上の未知なる生物や自然現象は人々を魅了してやまない。博物学は、人の純粋な好奇心—地球上のあらゆるものを見たい・知りたいという欲求とそれらを体系立てて理解したいという欲求—が原動力になって発展した。当時の博物学者たちの欲求はいまでも科学に連綿と受け継がれている。本書は私を植物研究の道へと誘い、私の人生に大きな影響を与えてくれた。（布施静香・植物系統分類学）

ところが、カレンはデニスを「所有」したかったのに対し、デニスはそれを拒み自由人として生きることを選んだ。農場経営も行き詰まり、アフリカをあきらめ帰国を決めた際、デニスが飛行機事故で死んだと聞かされる。失意のどん底で故郷に戻ったカレンは、「乾いた笑いで人生を振り返る」もう1人の自分を作り出す。私は、研究者を目指すも不安で押しつぶされそうになっていた20代後半でこの作品に出会った。自由な心をもち自分の足で歩くという研究者魂を後押ししてくれた一冊として、この作品は私の宝物である。（高橋淑子・発生生物学）

NOISE — SIGNALの外にあるもの

私たちは何かからSIGNALを感じ取ろうとする時、余計なもの、ノイズを予め除去して考える。
しかし、それらは本当に必要のないものなのか。今までは顧みなかったノイズに意識を向ければ、もうひとつのSIGNALが表れてくる。

ノイズがノイズでなくなる日：フェイクニュース

岡本正明（地域研究、政治学）

フェイクニュースは社会のノイズであって、嘘と分かればそれまで——そんな普通の感覚が揺らいでいる。サイバー空間への常時接続が当たり前になり、真偽ないまぜのニュースに晒され続ける。不都合な事実から目を背け、見たい「真実」だけを信じて世の中を理解できてしまう。同じような人（やロボット）のアカウントがたくさんあるのでおかしいとも思わない。近い将来、フェイクニュースが社会を理解する鍵となることさえありうる。2019年のインドネシア大統領選挙を調べていると、そういう日が来る気がする。ノイズがノイズでなくなる日、それは人間の脳においてオンライン社会とオフライン社会の区別が消え去った日ということでもある。

（1）『新版 インターネットの心理学』（パトリシア・ウォレス著／川浦康至・和田正人・堀正訳　NTT出版刊）
（2）IDEスクエア「ポスト・トゥルース時代の政治の始まり:ビッグデータ、そしてAI」（岡本正明）
http://hdl.handle.net/2344/00051445

信用リスクの研究におけるノイズ

KEVKHISHVILI, Rusudan（ファイナンス工学）

複数の企業が同時に債務不履行（デフォルト）に陥る可能性を数値的に把握することは、信用リスク管理上非常に重要である。企業のデフォルト相関を捉えるためにショットノイズ過程を用いることができる。本過程は不確実性の下で起こるショックの影響を累積した確率過程である。企業価値のモデルにショットノイズ過程を含めることによって、企業への負のショックの影響を捉えることが可能である。実証分析の結果より、ショットノイズ過程の影響を考慮する企業価値のモデルは、実務上一般に使われている企業価値のモデルより信用リスクの危機的状況に関するシグナルを早い段階で検出できる能力があると考えられる。

M. Egami, R. Kevkhishvili “An Analysis of Simultaneous Company Defaults Using a Shot Noise Process,”Journal of Banking and Finance 80, pp.135-161, 2017

テクストの「ノイズ」に耳を澄ませる —— ジェンダー論的文学研究

川島隆（ヨーロッパ文学、ジェンダー論）

グリム童話をはじめとするメルヘン（やそのディズニー映画版）は、「夢を与える」物語だとよく言われる。これに対してジェンダー論は、同じ物語がシンデレラ願望を女性に押しつけ、男性中心主義や異性愛主義を補強するイデオロギー装置として機能してきた側面に目を向ける。「夢が壊れる」と言う人もいるだろう。だが、この視点を通じ、これまで「ノイズ」として排除されてきた女性や性的マイノリティの声をテクスト内外から掘り起こすことが可能になるのだ。

（1）『お姫様とジェンダー　アニメで学ぶ男と女のジェンダー学入門』（若桑みどり著　筑摩書房刊）
（2）『イメージとしての女性』ジルヴィア・ボーヴェンシェン著／渡邊洋子・田邊玲子訳　法政大学出版局刊）

ノイズはノイズではない —— 少数者の人権

髙山佳奈子（刑法学）

今、旧優生保護法の下で強制不妊手術の対象とされた障がい者、ハンセン病患者や家族の受けた人権侵害に対する救済が裁判で問題となっている。かつて、性的マイノリティの性別適合手術は犯罪だとされ、外国でしか受けられなかった。これらの人たちはずっと声を上げ続けていたのに、そのシグナルはノイズとして斥けられてきたのだ。数十年ののち、果たして多数者は「個人の尊重」を至高の理念とする日本国憲法を理解したのだろうか？

（1）NHKハートネット「旧優生保護法を陰で支えた社会通念」
https://www.nhk.or.jp/heart-net/article/79/
（2）立命館大学生存学研究所HP
http://www.arsvi.com/index.htm
https://www.ritsumei-arsvi.org

『ニセ京大』 作・逆柱いみり

逆柱いみり：漫画家、イラストレーター。静岡県静岡市出身。「ガロ」や「アックス」に発表し、作品には「MaMaFuFu」、「赤タイツ男」、京都のトランスポップギャラリー（京大近く）でも個展が開催された「ニセ京都」がある。

Kyoto University
ACADEMIC GROOVE Vol. 1: SIGNAL — Humanities and Social Sciences

Writers (Speakers)

齋藤嘉臣（人間・環境学研究科 准教授）
熊谷誠慈（こころの未来研究センター 特定准教授）
山内裕（経営管理研究部 准教授）
太郎丸博（文学研究科 教授）
柴田悠（人間・環境学研究科 准教授）
高谷知佳（法学研究科 准教授）
明和政子（教育学研究科 教授）
金光桂子（文学研究科 教授）
藤原辰史（人文科学研究所 准教授）
古澤拓郎（アジア・アフリカ地域研究研究科 准教授）
高田明（アジア・アフリカ地域研究研究科 准教授）
石川登（東南アジア地域研究研究所 教授）
馬場基（人間・環境学研究科 客員准教授／奈良文化財研究所 史料研究室長）
佐藤卓己（教育学研究科 教授）
溝端佐登史（経済研究所 教授）
杉村靖彦（文学研究科 教授）
出口康夫（文学研究科 教授）
若林靖永（経営管理研究部 教授）
河野泰之（東南アジア地域研究研究所 教授）
中嶋節子（人間・環境学研究科 教授）
高木博志（人文科学研究所 教授）
IVINGS, Steven Edward（経済学研究科 講師）
ミツヨ・ワダ・マルシアーノ（文学研究科 教授）
岡田温司（人間・環境学研究科 教授）
岡田暁生（人文科学研究所 教授）
坂本龍太（東南アジア地域研究研究所 准教授）
佐藤俊哉（医学研究科 教授）
長田哲也（理学研究科 教授）
松田道行（生命科学研究科／医学研究科 教授）
沼田英治（理学研究科 教授）
湊丈俊（産官学連携本部 特定准教授）
薮塚武史（エネルギー科学研究科 助教）
高橋淑子（理学研究科 教授）
布施静香（理学研究科 助教）
岡本正明（東南アジア地域研究研究所 教授）
川島隆（文学研究科 准教授）
髙山佳奈子（法学研究科 教授）
KEVKHISHVILI, Rusudan（経済学研究科 講師）